

【原著論文】

小学校中学年のリズムダンスにおける単元開発に関する研究 —「技能」とその活用に着目して—

柴山 実穂^{*1}・笠井 利恵^{*2}・滝沢 洋平^{*3}・近藤 智靖^{*3}

^{*1} 日本体育大学大学院博士前期課程

^{*2} 日本体育大学大学院博士後期課程

^{*3} 日本体育大学

本研究の目的は、小学校体育科表現運動領域におけるリズムダンスの単元を作成し、授業実践を行い、児童の「技能」とその活用の視点から単元の有効性を検討することである。その際、小学校学習指導要領解説に示されている「軽快なリズムに乗って全身で踊る」と「友達と関わり合って踊る」をねらいとした。

作成した単元は、全5時間のリズムダンスの授業で、小学校4年生(38名)を対象に行った。作成した単元の有効性を検証するために、評価基準と分類表を作成し児童の動きから分析を行った。

結果として、3つのことが明らかとなった。

- 1) 単元5時間目になるとほとんどの児童が「軽快なリズムに乗って全身で踊る」を習得していた。
- 2) 単元後半になるにつれ、児童は学習した動きを作品に多く活用していた。
- 3) 本研究の単元は「技能」を学習するとともに、学習した動きを活用する上で有効であった。

キーワード：表現運動，リズムダンス，単元開発，技能，動きの活用

A Study on Rhythm Dance
Unit Development the 4th Grade School Children.
—Focus on “the skill” and Using in the Work—

Miho SHIBAYAMA^{*1}, Rie KASAI^{*2}, Youhei TAKIZAWA^{*3}, Tomoyasu KONDOH^{*3}

^{*1} Graduate Student of Master Course, Graduate School of Education,
Nippon Sport Science University

^{*2} Graduate Student of doctor Course, Graduate School of Education,
Nippon Sport Science University

^{*3} Nippon Sport Science University

The purpose of this study was to investigate the effectiveness of the Rhythm Dance unit regarding to “the skill” and using in the work for 4th grade school children. The unit included “dancing with the whole body to a jaunty rhythm” and “dancing together with other children”.

As method of study, the experimental classes were conducted over 5 hours, one-hour PE sessions in one school (38 children in 4th grade). We made criteria and a classification referring to preceding studies to analyze the children’s movements, and we investigated the effectiveness of the unit.

This study resulted in three main findings.

- 1) At the end of unit most children were able to dance with the whole body to a jaunty rhythm.
- 2) As the unit becomes late, children used a lot of movement that they learned to work.
- 3) The unit of this study was effective in learning "skill" and using in the work.

Key Words: expressive activity, rhythm dance, unit development, “the skill”, using in the work

1. 緒言

小学校学習指導要領解説体育編（以下、学習指導要領解説とする）（文部科学省，2018b）では、資質・能力の育成のために、主体的・対話的で深い学びの実現にむけた授業改善が求められており、単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通して行うことが示されている。体育科においても、資質・能力の三つの柱を育成する観点から、教科の目標や内容が見直された。

体育科における表現運動領域は、「自己の心身を解き放して、イメージやリズムの世界に没入してなりきって踊ることが楽しい運動であり、互いのよさを生かし合って友達と交流して踊る楽しさや喜びに触れることができる運動である」（文部科学省，2018b，p.101）と示されており、表現、リズムダンス、フォークダンスの3つの内容で構成されている。中でも、リズムダンスは、1998年の学習指導要領から導入され、他の2つと比べて新しい内容である。リズムダンスが導入された意図について村田（2012，p.6）は、「音楽やリズムが踊る誘発材料となり、リズムを共有して踊る楽しさ、人間の根源的な『律動の快感』に根ざしており、『踊る原点』としてリズムダンスは重要な側面である」と述べている。また、西村・川口（2005，p.105）はリズムダンスについて「現代的なリズムは、アップテンポで児童や生徒に親しみやすく、受け入れやすいものであり、初めて表現運動を経験する児童でもとりかかりやすい学習内容」と述べている。このことからリズムダンスは取り組みやすく、「踊る原点」を経験できる学習として行う意義が伺える。

しかし、リズムダンスの授業に関する課題も報告されている。ここでは2つの課題について述べる。1つ目は、単元の構成や学習内容についてである。村田・朴（2015，p.62）は、児童が決まった振り付けのみを習得することに終始してしまうことを課題としている。これは、「指導内容がわからない」ということや、教師の指導力や指導体制が整っていないことに原因があると考えられる（中村，2013，p.50；生関・岩田，2019）。この

ように学習内容や指導内容が不明瞭であるがゆえに、リズムダンスは単なる授業の導入としての部分的な教材として用いられ、リズムダンスを主とした単元構成で小学校中学年を対象とした授業実践は多いわけではない。その中でも、寺山（2015）は小学校3年生を対象に、6時間単元で授業実践を行い、本間（2017）は小学校3年生を対象に、5時間単元で授業実践の報告を行っている。これらの実践から、リズムダンスを主とした単元を構成し、児童がリズムダンスの特性を味わうことのできる単元の検討が必要であると考えられる。

2つ目は、実践研究の成果検証についてである。リズムダンスに関する実践研究は、これまでも数多く展開されてきた¹⁾（青木，2017²⁾；大西，2018³⁾）。その1つとして成瀬（2013）は、小学校5年生を対象にリズムダンスの授業を7時間単元で行っており、「踊る・創る・見る」活動を含めた実践を報告し、質問紙調査で児童のリズムダンスに対する意識について検証している。また、小林ほか（2014）は、小学校1年生を対象に表現リズム遊びの授業を7時間単元で構成し、「感じのある動きの探究」をコンセプトとした実践を報告している。ただし、学習成果の分析が不十分であることを課題としている（小林ほか，2014）。これらのように、質問紙調査や事例から、学習成果が述べられているものの、複数の視点から成果を明らかにできていない点に課題がある。

そこで、リズムダンス⁴⁾の学習成果について複数の視点から分析し検証する必要があると考えられる。その際、小学校学習指導要領（文部科学省，2018a；以下、学習指導要領とする）の改訂に伴って、学習内容に対応した成果検証をしていく必要がある。とりわけ、「技能」と学習した動きを活用していたかという視点から検証する必要があると考えられる。

また、学習指導要領解説（文部科学省，2018b）の表現運動領域の内容を見てみると、低学年の遊びを中心とした学習から、中学年⁵⁾にはリズムダンスとなり、「軽快なリズムに乗って全身で踊る」ことや「友達と関わり合って踊る」ことなどが示

されている。このことから、全身で踊ったり友達と関わり合ったりできるような単元を作成する必要があると考えられる。

以上のことから、本研究では、小学校中学年のリズムダンスにおける「軽快なリズムに乗って全身で踊る」と「友達と関わり合って踊る」をねらいとした単元を作成し、児童の「技能」とその活用の視点から単元の有効性を検討することとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小学校中学年におけるリズムダンスの単元を作成し、授業実践を行い、児童の「技能」とその活用から有効性を検討することである。その際、学習指導要領解説（文部科学省，2018b）に示されている「軽快なリズムに乗って全身で踊る」と「友達と関わり合って踊る」をねらいとした。

3. 研究方法

3.1 期間及び対象

本研究の授業実践は、2018年2月5日から2月14日にかけて、表現運動領域のリズムダンスを全5時間で実施した。対象は、埼玉県A小学校の4年生38名（男子児童18名、女子児童20名）であり、授業は実施校に勤務する教師歴17年の男性の担任教師（以下、授業者とする）によって行われた。なお、1時間目に欠席した男子児童4名と、女子児童3名を除いた計31名を分析対象とした。グループ編成に関しては、4人から6人で8組作り、2グループを兄弟グループとし、兄弟グループは全4グループとした。

3.2 単元計画

本研究のリズムダンスの単元計画作成にあたって、筆頭著者と授業者、体育科教育学を専門とする大学教員の計3名で検討を行った。

ところで、リズムダンスの単元の構成についての先行実践を見ると、たとえば、全国ダンス・表現運動授業研究会（2015）では、リズムダンス・フォークダンスの授業・単元の組み方を提示して

いる。その中でも中学年のリズムダンスは、「定型の踊りと即興表現を組み合わせた『のりのり遊園地』（p.56）から始めて、『ジャンケンダンス』（p.54）で定型の踊り方をもとに2人組で動きを工夫する学習に発展させ、『ロックに乗ってエアバンド』（p.58）でリズムに乗った即興表現から3・4人のグループで自分たちの踊りを決めて、1曲通して踊る」（全国ダンス・表現研究会，2015，p.70）といった単元の展開例を示している。これは、定型の踊りと即興表現を組み合わせた活動を通して、友達と関わり合いながら動きを工夫し創作していくという構成である。こうしたリズムダンスの先行実践を踏まえて、本研究では「定型の踊りと即興表現—即興表現から動きを工夫—グループで創作—交流会」という構成で単元計画を作成した。

さらに、本研究では、学習指導要領解説（文部科学省，2018b）に示されている「軽快なリズムに乗って全身で踊る」と「友達と関わり合って踊る」を単元のねらいとした。

「軽快なリズムに乗って全身で踊る」に関する単元の工夫として、まずはリズムに乗って定型のステップを踊ったり即興的に踊ったりしてリズムに乗ることができるような活動を行った。また、学習した「技能」の工夫や即興表現から新たな動きを創造するように、複数の教材を使用した。なお、教材の詳細については、後述をする。

また、「友達と関わり合って踊る」に関する単元の工夫として、グループで創作する活動や交流会といった活動を行った。グループで創作する活動は、「友達と関わって『技能』を活用できる活動を行う必要がある」（文部科学省，2013，p.33）とされていることから、児童が他者と関わりながら、学習した動きを活用していく活動とした。また、「毎授業や単元のまとめとして、創作した作品を見せ合う活動は、他者から賞賛をもらい、認められる喜びを味わい、次への意欲を高められることから表現運動の学習として重要である」（文部科学省，2013，p.33；中村，2015，p.141）とされていることから、兄弟グループで見せ合う活動を交流会とした。このような活動を通して、児童は学

習した動きや即興表現から動きを工夫するとともに、新たな動きを見つけたり選択したりしながら創作することができると考えられる。

なお、作成した単元計画をもとに、授業者と事前に打ち合わせを行ったうえで実践を行った。実践した単元計画は表 1 の通りである。

3.3 授業で行った教材及び教材の工夫した点

本研究では単元を通して DAPUMP の「U.S.A.」を選定し⁶⁾、「カモンベイビーダンシング」、「USA ウォームアップ」、「リズムカルタ」で使用した。この楽曲は、児童に親しみがあり、身近に感じられる軽快なリズムであるとともに、アップテンポの中でも 8 カウントで分かりやすく、児童がリズ

ムに乗りやすい曲である。

3.3.1 「カモンベイビーダンシング」

「カモンベイビーダンシング」は、本研究の主教材であり、グループで話し合いながら授業前半で学習する「USA ウォームアップ」や「リズムカルタ」、「足ジャンケンダンス」などの学習した動きを活用して創作することを意図している。そのため、本教材では、「定型の踊りと即興表現」の両者を組み込んだものとなっている。また、「カモンベイビーダンシング」は単元構成内の「即興表現から動きを工夫—グループで創作—交流会」に当たった。なお、作成した内容は表 2 に示した通りである。

表 1 授業の単元計画 *筆者作成

	1 時間目	2 時間目	3 時間目	4 時間目	5 時間目
ねらい	いろいろな友達と関わり合って、リズムダンスに進んで取り組む。	大きく体を使い、リズムに乗って踊ることが出来るようになる。	USA ライブに向けて、グループで創作を行う。	オリジナルダンスを完成させて、リズムに変化をつけて踊ることができる。	USA ライブを楽しみ、友達の良いところを見付けることが出来る。
5 分	・挨拶・健康観察				
10 分	「USA ウォームアップ」				
15 分	「足ジャンケンダンス」				「カモンベイビーダンシング」(発表会)
20 分	「リズムカルタ」				
30 分	「カモンベイビーダンシング」(創作活動，交流会を含む)				
45 分	・学習カードの記入・整理運動・まとめ・挨拶				

表 2 作成したカモンベイビーダンシングの内容 *筆者作成

	曲の構成	分数	カウント	内容
はじめ	前奏	0'00～0'18	8×4 (32 カウント)	定型ステップ (ジャンプ手拍子, ぐるぐるタッチ)
なか	A メロ	0'19～0'32	8×4 (32 カウント)	定型ステップ (USA ダンス+足の下タッチ, 手拍子)
	B メロ	0'33～0'45	8×4 (32 カウント)	各グループの創作
	サビ	0'46～0'59	8×4 (32 カウント)	定型ステップ (いいね! ダンス)
おわり	後奏	1'00～1'08	8×2 (16 カウント)	定型ステップ (ふきふき)

3.3.2 「USA ウォームアップ」

「USA ウォームアップ」は、曲に合わせて、全身を大きく弾ませて踊ること、仲間と関わり合う動きから心身をほぐすこと、コミュニケーションを図ることを意図した教材として、筆頭筆者が作成した。作成するにあたり、「動きがやさしいこと、心拍数をあげること、雰囲気をつくること」(中村, 2011, p.48) を重視した。また、「USA ウォームアップ」は、単元構成内の「定型の踊りと即興表現」の「定型の踊り」の部分に当たる。なお、「USA ウォームアップ」の動きの内容は、資料1に示した通りである。

3.3.3 「リズムカルタ」

「リズムカルタ」は、床に置かれた9種類のカルタをめくり、カルタにかいてある動きを即興的に表現することと、多様な動きを得ることを意図した教材である。

本教材は、村田(2011, p.58)が表現運動領域の表現の教材として提案している「〇〇カード(カルタ)」の手法を用いて作成した。この教材は、「取り上げた題材から踊りにしたら面白そうな場面や動きをカードにしたもので、カルタめくりの要領で気楽に即興の活動を進めていく活動であり、ゲーム感覚でいろいろなイメージに出会えること」(村田, 2011, p.58)が特徴である。カルタの内容に関しては、表現運動を構成する動きの要因である、空間性、時間性、力性を視野に入れ、へそ(体幹部)を中心に、リズムに乗って弾んで踊れる動き(文部科学省, 2018, p.103)を参考に作成した。また「リズムカルタ」は、単元構成内の「定型の踊りと即興表現」に当たる。なお、リズムカルタに記載されたカードの内容と、そこから児童が取り組む動きの例、並びにその意義については、表3に示した通りである。

表3 リズムカルタのカードの記載内容、動きの例、その意義 * 著者作成

カードの記載内容	動きの例	動きを行う意義
なみなみ(ウェーブ)	腕をくねくねさせたり、大きな波を腕や手で表したりする。	空間を高くつかったり、大きく使ったりすることができる。(全身を使う)
ロボット	腕や足を使って、カクカクする。	体の一部に力を加えたり、スローモーションで動いたりすることができる。
空気入れ	腕を胸の前から下や横に押し、ダウンを混ぜたりする。	空間を高く使ったり、大きく使ったりすることができる。(全身を使う)
パチパチ	頭の上や横、足の下などいろいろな場所で手をたたく。	手拍子でリズム、拍、速度など捉えることができる。(リズムの特徴)
ブンブン	手、腰、肩などを振ったり、揺らしたりする。	大きさ、高さ、位置、方向など空間を多く使える。
タッチ	足、お腹、頭、肩、足などをタッチする。友達とタッチする。	体のいろんなところを使うことでおへそ(体幹部)を捻ったり、折り曲げたりすることができる。
8の字	腕を後ろから前に大きく回したり、体の前で8を書いたりする。また、空間を8の字で移動する。	大きさ、高さ、位置、方向など空間を多く使える。
ぐるぐる	手でぐるぐる回したり、自分が回ったりする。	直線の動きだけでなく、曲線や弧の動きができる。
キラキラ	手の平を動かしてキラキラできる。	指先まで使うことを意識させる。

3.3.4 「足ジャンケンダンス」

「足ジャンケンダンス」は、中村（2015）が提案しており、体を大きく使ったり、小さく縮めたりしながら動きを繰り返すことで、動きに変化をもたせることを意図している。なお、「足ジャンケンダンス」に使用した楽曲は、児童がリズムに乗りやすいサンバのリズムの曲⁷⁾を使用し、1時間目から4時間目に行った。また「足ジャンケンダンス」は、単元構成内の「定型の踊りと即興表現」に当たる。

3.4 撮影方法

本研究では、授業内の様子を記録するために、デジタル HD カメラ（SONY 社製 HDR-CX675）を使用し、毎秒 60 コマ、シャッタースピードは 1/250 秒で撮影を行った。撮影方法は、体育館フロア 4 つ角と 4 つの辺上、ステージ上から 1 台の計 9 台のビデオカメラで撮影し、児童の動きを観察する際に死角がないように設置した。設置の仕方は、資料 2 の通りである。また、3 つのグループを抽出し、創作活動の場면을ビデオカメラ 3 台で撮影した。

なお、本研究は、日本体育大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施され、授業の実践及び撮影に関しては、事前に学校及び保護者の了承を得て行われた（研究倫理承認番号 018-H142 号）。

3.5 分析方法

本研究は、小学校中学年のリズムダンスにおいて、「軽快なリズムに乗って全身で踊る」と「友達と関わり合って踊る」をねらいとした単元を作成し、授業実践を行った。その際、児童の「技能」とその活用の視点から単元の有効性を検討することが目的であった。そのため、本研究の分析は学習指導要領解説（文部科学省，2018b，p.103）に示されている「軽快なリズムに乗って全身で踊る」を「技能」として評価基準を作成した。評価基準の作成にあたっては、先行研究及び児童から実際に出現した動きをもとに観点を検討した。また、本研究では、学習した動きが作品に反映されてい

たかどうかを活用とした。具体的には、「USA ウォームアップ」、「リズムカルタ」、「足ジャンケンダンス」で学習した動きを組み合わせたり、新たな動きを創作したりするなど、学習した動きが作品に反映され、動きとして現れたものをその活用とした。加えて、活用を評価するための分類表も作成した。

3.5.1 「軽快なリズムに乗って全身で踊る」に関する基準

（1）作成方法

「軽快なリズムに乗って全身で踊る」の評価基準を作成するにあたって、3 つの先行研究（安江，2004；高田・松尾，2013；清水，2017）の検討を行った。

1 つ目の安江（2004）は、小学生を対象にリズムダンスの単元を実施する際に、あらかじめ具体的な評価の視点について検討を行ったことで、授業中の児童一人一人の学習の様子を見ることができ、力を伸ばすことができたという成果を報告している。一方で、具体的な評価の視点について、作成段階に改善の余地があることや評価しているものの、具体的なデータがみられない点に課題があると考えられる。

2 つ目の高田・松尾（2013）は、中学生を対象にしたパフォーマンス評価の基準を提示しており、「リズムに乗って」と「リズムの特徴をとらえ」に関するパフォーマンス評価を作成し、児童の動作を分析している。高田・松尾（2013）は、観点をオリジナリティ、動きの種類、リズムの変化、体の使い方、音との同調とし、4 点満点で即興パフォーマンス技能の変容を明らかにしている。ただし、この評価基準は中学校の現代的なリズムのダンスの技能のねらいに照らして作成しているため、本研究では小学校中学年の目標及び内容に照らして検討する必要があると考えられる。

3 つ目の清水（2017）は、中学年を対象に「リズムに乗る」に関して評価基準を作成し評価をしている。その際、安江（2004）を参考にしており、3 段階（A 基準，B 基準，C 基準）の評価を実施し、児童の動きの変容を明らかにした。しかし、

表4 「軽快なリズムに乗って全身で踊る」の評価基準 *筆者作成

	A 評価	B 評価	C 評価
リズムに乗って全身で踊る	①へそ(体幹部)を中心に、その場で弾んだり、体の各部分でリズムをとったりして、全身を使って踊っている。 ②音に合わせて外すことなく踊っている。	①へそ(体幹部)を中心にその場で弾んだり、体の各部分でリズムをとったりして踊っている。 ②おおむね音に合わせて踊っている。	①へそ(体幹部)を中心に弾むことができない。体の各部分でリズムをとっていない。 ②音にあっていない。
留意点	○「その場で弾む」とは、膝を上下にしたり、へそ(体幹部)を上下左右に動かしたりしながらリズムをとっていること。 ○創作の部分で、構成上、止まらざる負えない場合は、音にあっていないとはならない。	○音を外すことなく踊れていても、全身で踊れていない場合は、B 評価となる。	○「音にあっていない」とは、音と動きがずれていたたり、止まっていたり、音に対して動きが遅れていたたり、早まっていたりすること。 ○音にあっているのが総カウントの半分以下である。 ○音を外すことなく踊れていても、全身で踊れなかったり、体の各部分でリズムをとっていないかったりする場合は、C 基準となる。

※①又は②のどちらかが低い評価となると、低い評価のほうが優先される。例えば、①が A 評価、②が B 評価であれば全体の評価は B 評価となる。

清水の評価基準をもとに、本研究の授業実践における児童の動作を評価してみたところ、それぞれの動きにおける詳細な評価の観点について記載がなかったため、十分に評価することが困難であった。

これらを踏まえて、本研究では「軽快なリズムに乗って全身で踊る」を評価するために、基準から児童を観察する際の観点や動きを定義し、A 評価、B 評価、C 評価の児童の動きに関して具体的な動きの例示と評価する際の留意点を記載した新たな評価基準を作成した。分析対象は、交流会時に児童から現れた動きとし、分析は児童 1 名ずつ行った。

作成にあたっては、体育科教育学を専門とする大学教員 1 名、体育科教育学を専門とする大学院生 2 名の計 3 名で検討し合議した上で作成した。なお、本研究において作成した評価基準は表 4 に示した通りである。

(2) 評価方法

本研究では、作成した評価基準を用いて、毎時間で行う交流会時における児童の動きを評価し変容を明らかにする。評価し、「技能」の変容を明らかにすることによって、単元を通した授業の成果をみることにした。

評価の手順については、以下の手順で行った。

1 分 8 秒の曲中における児童の動きを観察し、へそ(体幹部)を中心に、その場で弾んだり、体の各部分でリズムをとったりして、全身を使って踊っているかを評価する。次に、音に合わせて、音に外すことなく踊っているかを評価する。

なお、各評価について「A 評価(3 点)」、「B 評価(2 点)」、「C 評価(1 点)」で集計を行い、平均点を算出した。

表 5 作品への活用 *筆者作成

USA ウォームアップ		リズムカルタ	足ジャンケンダンス	オリジナルな動き	その他
定型ステップ	その他				
定型ステップの動きと同じ動きを反映している。	定型ステップ以外の動きで USA ウォームアップと同じ動きを反映している。	USA ウォームアップ, 足ジャンケンダンス, オリジナルな動きその他以外で 9 種類のカードの動きを反映している。	USA ウォームアップ, リズムカルタ, オリジナルな動き, その他以外で足ジャンケンダンスの動きを反映している。	学習した動き以外の動きを反映している。	移動や準備をしている。
グループの半数以上が同じ動きをしている。					グループの半数以上がそれぞれ違う動きをしている。

※分類する際は、分類条件のいずれかに当てはまる動きを 1 セット（8 カウント）ずつ分類する。

※1 つの動きに複数の動きが入った場合はすべてカウントする。具体的には、「USA ウォームアップ」の定型ステップの動きと、「リズムカルタ」の「ぐるぐる」というカードの動きを反映している場合などを指す。

3.5.2 「作品への活用」に関する分類表

(1) 作成方法

「作品への活用」に関する分類表は、各教材で学習した動きを作品に反映させていたかを確認するために作成した。なお、作成した「作品への活用」の分類表は、表 5 に示した通りである。

「USA ウォームアップ」で行った動きを活用している場合は「定型ステップ」と「その他」で分類した。「定型ステップ」に分類する動きは、「USA ウォームアップ」の「定型ステップ」の動きと同じ動きを反映している場合を対象とした。「リズムカルタ」は、「USA ウォームアップ」、「足ジャンケンダンス」、「オリジナルな動き」「その他」以外で 9 種類のカルタに書かれている動きを反映している場合に分類される。「足ジャンケンダンス」は、「USA ウォームアップ」、「リズムカルタ」、「オリジナルな動き」、「その他」以外で「足ジャンケンダンス」のジャンケンを反映している場合に分類される。「オリジナルな動き」は、授業で学習した

動き以外の動きを反映している場合に分類される。

「その他」は、動きの間の移動や次の動きの準備をしている場合に分類される。また、グループの半数以上が同じ動きをしている場合に「USA ウォームアップ」、「リズムカルタ」、「足ジャンケンダンス」、「オリジナルな動き」で分類し、グループの半数以上がそれぞれ違う動きをしている場合は「その他」に分類した。なお、実際に児童の動きを分類した際に、複数の動きを活用することが考えられるため、本研究では、1 つの動きをいづれかに分類するのではなく、それぞれで分類しカウントをした。

「作品への活用」の表を作成する手続きは、3 つのことから行った。1 つ目は、本研究の単元内で行った教材の中の学習した動きであるか、オリジナルの動きであるか、移動や準備といったその他の動きであるかをわける必要があったため、大きな枠組みを 3 つ設定した。2 つ目に、本研究で行った教材は「USA ウォームアップ」、「リズムカル

タ」,「足ジャンケンダンス」の3個あったため、それぞれで学習した動きであるかの枠組みをさらに3つ設定した。3つ目に,「USA ウォームアップ」のみ,「カモンベイベーダンシング」でも行う「定型ステップ」と「USA ウォームアップ」のみで行う「その他」の2つにわけられるため,2つにわけて設定した。

(2) 分類方法

本研究では,作成した分類表を用いて,毎授業で行う交流会時に児童から現れる動きの分類を行い,創作した作品の内容を明らかにする。それによって,授業内で学習した動きの活用について確認した。なお,分類対象の項目が混在している場合は,1つの動きをいずれかに分類するのではなく,それぞれ分類することとした。

分類の手順については,以下の手順で行った。1分8秒の曲中における児童の動作を1セット(8カウント)ずつに分ける。次に,グループ内に同じ動きをしている児童が半分以上いるかを確認する。最後に,動きの条件を観察し,各項目に分類する。

3.5.3 形成的授業評価

高橋ほか(1994)が作成した形成的授業評価票を用いて,毎授業終了後に調査を行った。これは,児童が授業をどのように感じたのか,児童による授業評価を検討するためであり,9項目の質問から成果,意欲・関心,学び方,協力の4因子について明らかにできるよう構成されている。調査票の各項目の回答について,「はい(3点)」、「どちらでもない(2点)」、「いいえ(1点)」で集計を行った。また,毎時間の質問項目の平均点から各因子の評価,全項目の平均得点から総合評価を行った。

3.6 統計処理

分析の対象は,毎時間の創作活動で作った作品に限定した。その際,「軽快なリズムに乗って全身で踊る」の結果に関して対応のある t 検定を行い,効果量⁸⁾を算出した。統計処理ソフトは IBM

SPSS Statistics 24 を使用し,有意水準は5%に設定した。

3.7 分析の信頼性

分析の信頼性を確保するために,すべての項目に関わって体育科教育学を専門とする大学教員1名,体育科教育学を専門とする大学院生2名の計3名で分析し,信頼性テストを実施した。そして,観察者相互間の一致率が80%以上になるまでトレーニングを繰り返し,すべての分析項目において80%以上の一致率が得られた。なお,最終的な分析は安定したデータを得るために1人の観察者によって行われた。

4. 結果・考察

4.1 「軽快なリズムに乗って全身で踊る」の変容

1時間目と5時間目における全児童の「技能」の習得をみるために,同時間における全児童の「軽快なリズムに乗って全身で踊る」の評価の平均は,表6のようになった。得点をみると,1時間目の1.97点から5時間目の2.48点へと,有意に向上した($t=-5.043, p<.001, d=0.78$)。

続いて,毎時間における全児童の「技能」の習得の変容をみるために,毎時間における全児童の「軽快なリズムに乗って全身で踊る」の評価の割合は,表7のようになった。「軽快なリズムに乗って全身で踊る」においてA評価であった児童の割合は,1時間目は25.8%であったが,5時間目には51.6%となった。B評価であった児童の割合は,1時間目は45.2%であったが,5時間目も45.2%となった。C評価であった児童の割合は,1時間目は29.0%であったが,5時間目には3.2%となった。

この結果から,5時間目になるとほとんどの児童が「軽快なリズムに乗って全身で踊る」についてB評価以上になったことが明らかとなった。これは,「定型の踊りと即興表現」の部分に当たる「USA ウォームアップ」において,仲間と関わ合う動きから心身をほぐすことができ,スムーズにリズムダンスの授業に入ったことで自然と動く

表 6 1 時間目と 5 時間目における「軽快なリズムに乗って全身で踊る」の変化 * 筆者作成

人数	1 時間目 (点)	5 時間目 (点)	<i>t</i> 値
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	
n=31	1.97 (0.752)	2.48 (0.570)	-5.043***

M: 平均, *SD*: 標準偏差, ***: $p < .001$

表 7 「軽快なリズムに乗って全身で踊る」についての割合の変化 (n = 31) * 筆者作成

	1 時間目		2 時間目		3 時間目		4 時間目		5 時間目	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
A 評価	8 人	25.8%	11 人	35.5%	7 人	22.6%	9 人	29.0%	16 人	51.6%
B 評価	14 人	45.2%	15 人	48.4%	15 人	48.4%	15 人	48.4%	14 人	45.2%
C 評価	9 人	29.0%	5 人	16.1%	9 人	29.0%	7 人	22.6%	1 人	3.2%

ことができたと考えられる。また、「USA ウォームアップ」を行うことで、1 時間目の時点で約 70% の児童が「軽快なリズムに乗って全身で踊る」に関する評価に対して、B 評価以上と高い値を示している。これは、「USA ウォームアップ」の動きが易しかったことや曲のリズムに合わせやすい動きであったため、「軽快なリズムに乗って全身で踊る」ことができるようになったと考えられる。さらに、「定型の踊りと即興表現」の部分に当たる「足ジャンケンダンス」において、全身を使って踊ることを中心に指導を行ったため、次の活動である「リズムカルタ」にも全身で踊ることが影響したと考えられる。これは、「足ジャンケンダンス」の次に「リズムカルタ」を行ったことによって、児童が動き方を学ぶことができ、全身で踊ることが影響した可能性がある。具体的には、「足ジャンケンダンス」で体幹を上下させるなど、体の高さを変化させることを意図的に行ったため、単元後半になるにつれ全身で踊れるようになった児童が増えたと考えられる。そして、「リズムカルタ」では、全身で踊ることに加え、サンバやロックのリズムの曲からリズムの特徴を捉え、リズムに乗って弾むことができたと考えられる。次に行った、「即興表現から動きを工夫」と「グループで創作」の部分に当たる「カモンベイビーダンシング」では、「USA ウォームアップ」と同じ楽曲であったことから、リズムに乗りやすく弾むことができていた

と考えられる。一方で、単元の 1 時間目から 3 時間目の交流会では、曲のリズムに合わせて踊っているものの、体の一部のみで踊っている児童がいたため、C 評価が多かった。しかし、単元が進むにつれ、友達と関わり合う「足ジャンケンダンス」や「リズムカルタ」で心身を解放したことにより、5 時間目の「発表会」において「軽快なリズムに乗って全身で踊る」ことができるようになったと考えられる。

以上のことから、「定型の踊りと即興表現ー即興表現から動きを工夫ーグループで創作ー交流会」で単元構成としたことで、5 時間単元では単元後半になるにつれ「軽快なリズムに乗って全身で踊る」ことが習得できることが示唆された。

4.2 「作品への活用」の変容

本研究で作成した、「作品への活用」の分類表に基づいて、全児童の動きを分類した結果、図 1 と表 8 のようになった。図 1 と表 8 は、児童が創作した作品における各項目のセット数を明らかにすることによって、毎時間の作品の内容の変化を示している。まず、「USA ウォームアップ (定型)」において 1 時間目から 5 時間目の結果を見てみると、1 時間目の 112 セットから 5 時間目には 58 セットへと減少した。「USA ウォームアップ (その他)」⁹⁾については、1 時間目の 6 セットから 5 時間目には 20 セットへと増加した。「足ジャンケ

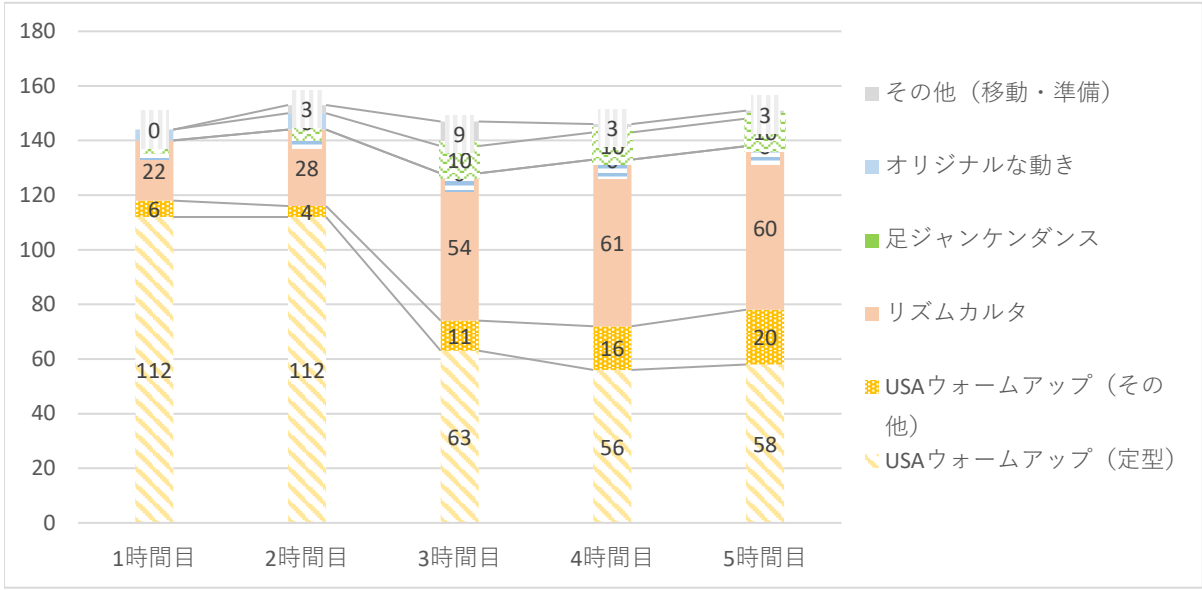


図 1 「作品への活用」の変容 *筆者作成

表 8 「作品への活用」の変容 *筆者作成

	1 時間目	2 時間目	3 時間目	4 時間目	5 時間目
①USA ウォームアップ（定型）	112	112	63	56	58
②USA ウォームアップ（その他）	6	4	11	16	20
③リズムカルタ	22	28	54	61	60
④足ジャンケンダンス	0	0	0	0	0
⑤オリジナルな動き	4	6	10	10	10
⑥その他（移動・準備）	0	3	9	3	3

ンダンス」については、1 時間目から 5 時間目まで活用されていなかった。「リズムカルタ」については、1 時間目の 22 セットから 5 時間目には 60 セットへと増加した。「オリジナルな動き」については、1 時間目の 0 セットから 5 時間目には 10 セットへと増加した。とくに「オリジナルな動き」は、2 時間目以降、徐々に増加していった。「その他（移動・準備）」については、1 時間目の 0 セットから 5 時間目には 3 セットへと増加した。

この結果から、単元の 3 時間目以降になると「USA ウォームアップ（定型）」の活用が減少し、「USA ウォームアップ（その他）」や「リズムカルタ」を活用し作品を創作していたことが明らかとなった。「USA ウォームアップ（定型）」が、2 時間目から 3 時間目にかけて、112 セットから 63 セットへと大幅に減少している理由は、教師が意

図的に自由に創作しても良い部分を増やしたからである。

さらに、毎時間の授業の前半部分では友達と関わり合いながら動きを習得する教材を行ったことで、動きを組み合わせたり、新たな動きを創造したりしていた。また、1 つの教材からではなく、「USA ウォームアップ」や「リズムカルタ」など 2 つの教材から動きを多く取り入れていたことが明らかとなった。とくに、「リズムカルタ」は全グループが活用していたことから、グループで創作する際に、他の動きとの組み合わせや発展が考えやすく、多様な動きを連想することができる教材であったと考えられる。このことから単元内でいくつかの教材を行うことによって、動きを活用し、創作活動をしていたことが明らかとなった。

また、学習した動きをもとに創作活動の話し合

いや関わり合いが活発になっていたことから、前半で学習した動きが創作活動の際の材料となり、それらを言葉や体で友達と対話し、探究していく契機となったと考えられる。この結果は、「USA ウォームアップ」「足ジャンケンダンス」「リズムカルタ」などから、創作活動の契機となる動きを習得し、動きを活用し、表現する学習の手掛かりを得ることができたと考えられる。

そして、「定型の踊りと即興表現—即興表現から動きを工夫—グループで創作—交流会」という構成にし、徐々に動きの自由度の幅を増やしたことで、児童は授業の後半になるにつれ、動きを選択し、作品に活用していたと考えられる。このことから、動きを組み合わせたりするなど、創作する際の手立てとなったと考えられる。

以上のことから、「定型の踊りと即興表現—即興表現から動きを工夫—グループで創作—交流会」の構成で授業を行うことによって、いくつかの動きを組み合わせたり、新しい動きを創造したりなど、創作活動の中で個人やグループの考えを形成したりし、動きを活用していたことが示唆された。また、単元が進むにつれ、動きのバリエーションが増えたことによって、動きや考えを友達に伝えたり、体で表現したり、創作活動が活発になったことが明らかとなった。

4.3 形成的授業評価の変容

図2は、4年1組の形成的授業評価の結果である。図2は、児童による授業評価を明らかにすることによって、児童が授業をどのように感じたのかを示している。総合評価を見てみると、1時間目の2.65から5時間目の2.90に向上しており、単元を通して高い水準を保っている。このことから今回の実践について、児童の授業評価は高かったといえる。成果に関しては、1時間目の2.45から5時間目の2.85に向上しており、意欲・関心に関しては、1時間目の2.88から5時間目の2.89に向上しており、学び方に関しては、1時間目の2.64から5時間目の2.86に向上しており、協力に関しては、1時間目の2.72から5時間目の2.90

となり、すべての項目が高い水準であった。

以上、形成的授業評価の結果から、児童は単元を通して成果を感じており、意欲的に取り組む姿勢を持ち、創作活動の中で協力し合い、さまざまな動きができるようになったことを実感したと考えられる。

5. まとめ

本研究では、小学校中学年を対象とした、表現運動領域におけるリズムダンスの「軽快なリズムに乗って全身で踊る」と「友達と関わり合って踊る」をねらいとした単元を作成し、「技能」と動きの活用の視点から単元の有効性を検討した。そこで、作成した単元が有効であったかを検証するために、学習指導要領解説（文部科学省、2018b, p.103）の「技能」に示されている、「軽快なリズムに乗って全身で踊る」に関する評価基準を作成した。また、児童が学習した動きを活用し、作品を創作していたかについて分類表を作成し、その活用として分析を行った。作成した基準表と分類表を用いて、毎授業における児童の動きを評価、分類、形成的授業評価の結果から以下のようにまとめることができる。

①「定型の踊りと即興表現—即興表現から動きを工夫—グループで創作—交流会」といった単元構成としたことで、本実践の5時間単元では、単元後半になるにつれ「軽快なリズムに乗って全身で踊る」ことが習得できることが示唆された。

②①で示した単元構成で授業を行うことによって、いくつかの動きを組み合わせたり、新しい動きを創造したりなど、創作活動の中でグループの考えを形成したと考えられる。このことから、学習した動きを活用していたことが示唆された。

③「定型の踊りと即興表現」に当たる「USA ウォームアップ」や「足ジャンケンダンス」、「リズムカルタ」を行ったことで、「軽快なリズムに乗って全身で踊る」は、96.8%の児童がB評価以上に達したことから、本単元は「技能」の習得と動きの活用という点で有効であったことが示唆された。

また、「作品への活用」に関する分類では、単元後半になるにつれ動きを組み合わせたり、新たな

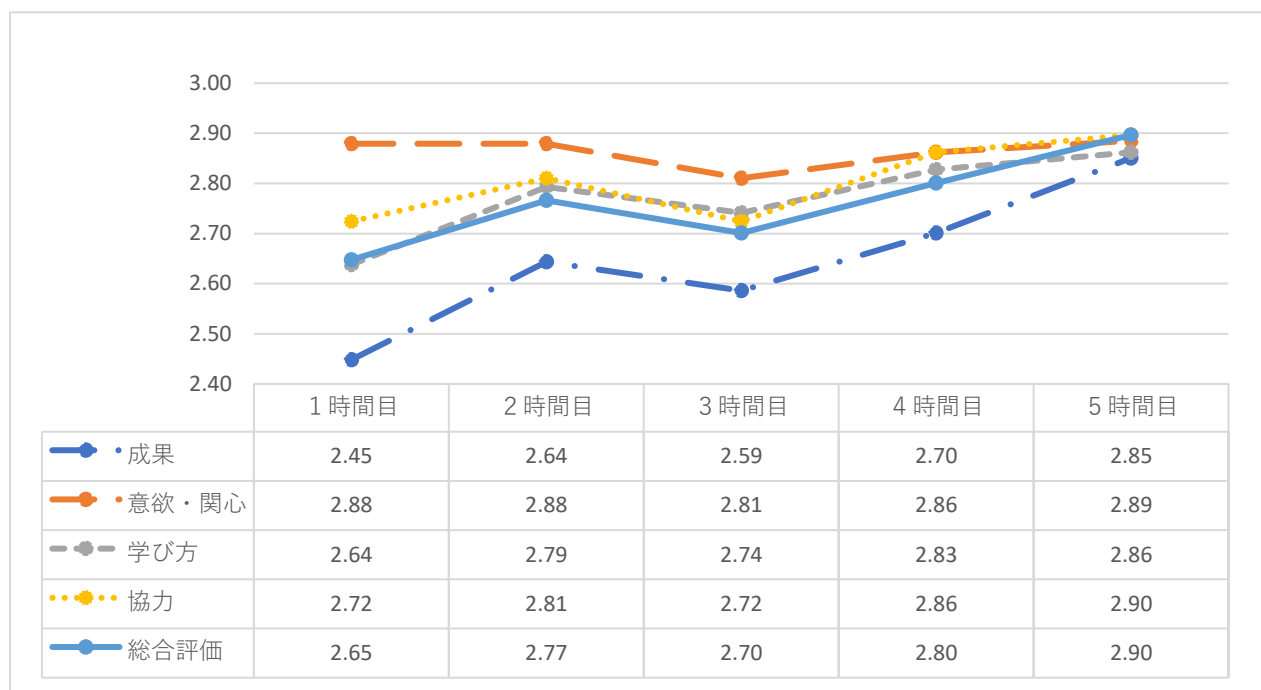


図2 形成的授業評価

動きを創造していたり、学習した動きを作品に活用したことから本単元の構成は有効であったことが明らかとなった。

以上のことから、「定型の踊りと即興表現ー即興表現から動きを工夫ーグループで創作ー交流会」のような単元構成にしたことで、児童は単元後半になるにつれ、各教材で行った動きを習得し、動き方を工夫し、創作活動を友だちと関わりながら進めており、成果を感じることができるようになったと考えられる。この結果は、松本（2017）¹⁰⁾の先行研究に見られた結果と同様であると考えられる¹¹⁾。

さらに、これまで行われてきたリズムダンスの研究と比較すると、「技能」のみの分析や児童の意識調査だけの分析でなく、学習指導要領（文部科学省，2018a）を踏まえて「技能」と動きの活用の2つの視点から分析したことによって、リズムダンス単元の成果が明らかとなった。こうした研究を通じて、今後リズムダンスの単元を構成し、実証的な研究を進めていく上での基礎資料を得ることができたと考えられる。

なお、本研究において残された課題も明らかとなった。それは、「技能」と動きを作品に活用して

いたかを推察することにとどまった。そのため、リズムダンスの単元構成について児童の動きのみならず、創作活動時の会話の質や学習カードの記述内容からも分析し、今後の課題としたい。

注

- 1) リズムダンスの中に表現を含んでいる実践、現代的なリズムのダンスの要素を含んだ実践を指す。
- 2) 青木（2017）の研究では、小学生を対象に運動の楽しさを味わい、仲間とのかかわりを豊かにする子供を育てることを目的とした実践を行っている。
- 3) 大西（2018）の研究では、小学校5年生を対象に、子どもの学びをイメージし、単元にストーリー性を描くように単元計画を立て、授業実践を行っている。
- 4) 学習指導要領解説（文部科学省，2018b）において、表現運動領域リズムダンスは「リズムダンス」と記載されているため、本研究では「リズム系ダンス」と書いている内容は、「リズムダンス」の内容として記載している。
- 5) 学習指導要領解説（文部科学省，2018a）にお

けるリズム系ダンスの位置付けは、低学年のリズム遊びから中学生のリズムダンスへ発展するが、高学年においては、リズムダンスを加えて指導することができると示されている。発達段階における指導について秋山 (2015) は、「高学年になると表現運動に対してさらに抵抗を感じる子が増えると予想される」としており、中学年でリズムダンスの楽しさに触れ、学習を充実させることで、高学年になっても進んで表現運動の学習に取り組むことができると考えられる。さらに、中学年の児童は、「成長期前のため体も軽く、動くことへの羞恥心を感じにくい時期である」としており、「低学年の時よりも筋力がついて、自在に動ける可能性が広がり運動の楽しさを十分に味わえる時期」(寺山, 2015, p.26) であるとされている。

- 6) 楽曲選定の理由は、そのときに流行っている歌を扱うなど、声に出して歌いながら楽しさや一体感を味わえる曲 (君和田, 2015, p139) や軽快なロックやサンバのリズム (安江, 2017) であることから、本研究の実践で使用する楽曲として適していると考えられたためである。
- 7) 学習指導要領解説 (文部科学省, 2018b, p.103) には、『ンタッタ (2 拍) ンタッタ (2 拍)』(※下線は、強調を表す) もシンコーペーションのリズムと打楽器の小刻みなビートのリズム」と示している。
- 8) 対応のある t 検定の効果量の指標については、“Cohen’s *d*” (小: $0.20 \leq d < 0.50$, 中: $0.50 \leq d < 0.80$, 大: $0.80 \leq d$) を用いた。
- 9) 「USA ウォームアップ (その他)」とは、「USA ウォームアップ (定型)」の中で、定型ステップではない部分を指す。具体的には、チョキでダウン、斜め上をふきふき、カニさん歩き、チューチュートレインなどである。
- 10) 松本 (2017) の研究では、大学生を対象に学習資料を工夫したリズムダンス授業における学習者の認知に関する実践を行っている。松本は、学習が進むにつれ児童は情意的に活動

を捉えるだけではなく、自発的な活動を進めながら完成や達成を感じることができたという結果を示している。

- 11) 形成的授業評価の協力次元が高い数値で推移したことから「友達と関わり合って踊る」という単元のもう一つのねらいを児童は実感していたものと推察される。そのため、本単元は「友だちと関わって踊る」という点でも有効であったことが推察される。

引用・参考文献

- 青木由利子 (2017) 「小学校の表現運動 運動の楽しさを味わい、仲間とのかかわりを豊かにする子供の育成:リズムダンスの学習を通して (ダンスがひらく学びの世界:だれもが主役・みんなが主役)-- (表現・ダンス実践研究)』『女子体育』日本女子体育連盟, 59(4・5), pp.16-21.
- 秋山知洋 (2015) 「中学校のダンス生徒が楽しみながらできるダンス授業:ICTを活用した現代的なリズムのダンス (ダンスの力をすべての人へ:新たなチャレンジ) - (表現・ダンス授業実践)」『女子体育』日本女子体育連盟, 57(2・3), pp.28-33.
- 本間知可 (2017) 「リズムダンスにおける即興表現の楽しさを味わわせる指導の工夫:「やってみる・ひろげる」を位置付けたゴルフ学習を通して」『上越教育大学学校教育実践研究センター』27, pp.145-150.
- 生関文翔・岩田昌太郎 (2019) 「小・中学校教員におけるリズム系ダンス指導の悩み事に関する調査研究—性別・校種・ダンス指導歴および教職経験年数の差異をてがかりに—」『日本教科教育学会誌』42(1), pp.65-74.
- 小林真理子・岩田靖・佐々木優 (2014) 「小学校体育における「リズム遊び」の授業づくり—「感じのある動きの探究」の視点から—」『信州大学教育学部附属実践総合センター教育実践研究』15, pp.55-64.
- 君和田雅子 (2015) 「第 7 章「子どもたちをその気にさせるベテラン先生の技」6 音楽や楽器の

- 工夫」宮本乙女・中村恭子・中村なおみ『みんなでトライ！表現運動の授業，全国ダンス・表現運動授業研究会』大修館書店，p.139.
- 松本奈緒(2017)「中学校段階のリズムダンス授業における学習者の形成概念－カードとキネクトによる動きの提示とタブレット型 PC による動きの確認を工夫して－」『秋田大学教育文化学部研究紀要』教育科学部門，(72)，pp.111-121.
- 宮本乙女・中村恭子・中村なおみ(2015)『みんなでトライ！表現運動の授業，全国ダンス・表現運動授業研究会』大修館書店，p.70.
- 文部科学省(2013)『学校体育実技指導資料第9集 表現運動系及びダンス指導の手引き』東洋館出版社.
- 文部科学省(2018a)『小学校学習指導要領(平成29年告示)』東洋館出版社.
- 文部科学省(2018b)『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説体育編』東洋館出版社.
- 村田芳子(2011)『表現運動・表現の最新指導法』小学館.
- 村田芳子(2012)『新学習指導要領対応表現運動－リズムダンスの最新指導法』小学館.
- 村田芳子・朴京眞(2015)「中学校現代的なリズムのダンスロックやヒップホップのリズムに乗って：音楽のリズムを感じて自由に踊ろう（ダンスの力をすべての人へ保存版!ダンス指導ハンドブック（6）ダンス指導実践集：すぐに役立つコツとポイント）--（中学校・高等学校 ダンス指導実践集）」『女子体育』日本女子体育連盟，57(8・9)，pp.62-67.
- 中村恭子・宮本乙女・中村なおみ(2011)『明日からトライ！ダンス授業，全国ダンス・表現運動授業研究会』大修館書店.
- 中村恭子(2013)「日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題」『スポーツ社会学研究』21(1)，pp.37-51.
- 中村恭子(2015)「中学校現代的なリズムのダンス 足ジャンケンからヒップホップへ ロックのリズムで「8・8・16・止・止」：動きやリズムに変化をつけて、ひとまとまりのフレーズで踊る（ダンスの力をすべての人へ保存版!ダンス指導ハンドブック（6）ダンス指導実践集：すぐに役立つコツとポイント）--（中学校・高等学校 ダンス指導実践集）」『女子体育』日本女子体育連盟，57(8・9)，pp.68-73.
- 中村恭子(2015)「第7章「子どもたちをその気にさせるベテラン先生の技」8 発表・鑑賞から次へつなげる」宮本乙女・中村恭子・中村なおみ『みんなでトライ！表現運動の授業，全国ダンス・表現運動授業研究会』大修館書店，p.141.
- 成瀬麻美(2013)「「踊る・創る・見る」を取り入れたリズムダンスの授業：F 小学校を事例に」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』愛知教育大学保健体育講座，(38)，pp.19-26.
- 西村依子・川口千代(2005)「表現運動の学習指導に関する研究－「表現」と「リズムダンス」の指導の在り方を中心に－」『京都女子大学発達教育学部紀要』1，pp.105-117.
- 大西美輪(2018)「小学校の表現 子どもの「やってみてみたい」から始まるリズムダンス実践:子どもの学びのストーリーを描く（ダンスがひらく学びの世界 主体・対話・創造:対話的な学びの仕かけ）--（表現・ダンス実践研究）」『女子体育』日本女子体育連盟，60(6・7)，pp.22-27.
- 清水麻紀(2017)「小学校体育授業における表現運動の教材に関する研究－表現性を持ったリズムダンスに焦点を当てて－」『日本体育大学大学院』修士論文.
- 高田康史・松尾千秋(2013)「現代的なリズムのダンスの授業の学習内容に関する検討：中学生のステップ習得成果に焦点づけて」『舞踊教育学研究』15，pp.35-44.
- 高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎(1994)「体育授業の「形式的授業評価」作成の試み：子どもの授業評価の構造に着目して」『体育学研究』39(1)，pp.29-37.
- 寺山由美(2015)「小学校中学年リズムダンス「リズムと友だち!」：リズムが変わると動きが変わるね（ダンスの力をすべての人へ 保存版!ダンス指導ハンドブック（6）ダンス指導実践集：

すぐに役立つコツとポイント)-- (幼児・小学校・特別支援 表現遊び・表現運動指導実践集)』『女子体育』日本女子体育連盟, 57(8・9), pp.26-31.
徳永隆治 (2018)「体育科授業の今日的課題における「集団思考場面」の意義ー「主体的・対話的で深い学び」の授業づくり」『安田女子大学紀要』46, pp.129-138.

安江美保 (2004)「指導と評価の一体化を大切にしたリズムダンスの授業ー単元における具体の評価基準」『女子体育』日本女子体育連盟, 46(2), p.12.

安江美保 (2017)「実践編小学校・中学年リズムダンスロックやサンバのリズムに乗って自由に踊ろう：主体的・対話的・創造的な授業づくりをめざして (ダンスがひらく学びの世界保存版!ダンス指導ハンドブック (8) 新学習指導要領ダンス指導の Q&A・ダンス指導実践集)-- (ダンス指導実践集)」『女子体育』日本女子体育連盟, 9(8・9), pp.60-65.

資料1 「USA ウォームアップ」の内容

曲	動き
前奏	手は腰にしてポーズ
	その場で大きくジャンプ
	ジャンプしながら手拍子
A メロ	クロスクロスマッちょ
	リズムに乗って屈伸
	クロスクロスマッちょ
	膝まわし⇒逆回し
	クロスクロスマッちょ
	アキレス腱
	クロスクロスマッちょ
	アキレス腱
B メロ	小さいぐるぐる 手をまわす
	斜め上をふきふき
サビ	イイね!ダンス
	腕を開いてかかとをタッチ
	イイね!ダンス
	なみなみぐるぐるパン
間奏	ジャンプしながら手拍子
A メロ	クロスクロスマッちょ
	ダウンのリズム (両足ひらいて)
	クロスクロスマッちょ
	チョキでダウンのリズム
B メロ	小さいぐるぐる 手をまわす
	斜め上をふきふき
サビ	イイね!ダンス
	腕をひらいてかかとタッチ
	小さいぐるぐる 手をまわす
	斜め上をふきふき
	イイね!ダンス
	なみなみぐるぐるパン
間奏	グループで円になって手をつなぐ。
	その場で大きくジャンプ
	カニ歩きで高速回転
	チューチュートレイン
	高速チューチュートレイン
	体育館全体に広がる
サビ	イイね!ダンス
	腕を開いてかかとタッチ
	イイね!ダンス
	なみなみぐるぐるパン
後奏	大きく深呼吸

資料2 ビデオカメラの設置位置

